

がんの教室

田中 伸哉

⑦

がんは進行度によって早期がんと進行性のがんに分かれる。がんの治療には早期発見が何より重要だ。早期であれば切除して治療する可能性が高い。例えば国立がんセンター(現国立がん研究センター)の2004年の報告によると、胃がんの診断から5年後の生存率は、全体では67%だが早

進行度はどう見るか

期は91%以上で、内視鏡切除術の発達したこの10年でさらに高くなっているはずだ。

一方、進行性は切除した後に抗がん剤や放射線

療法が必要となり、治療も難しくなる。

がんの進行度はステージⅠからⅣの4期に分かれる。どの臓器でもおおまかにⅠ期は早期で、Ⅱ期以降は進行性である。進行度は①がんの大きさや深さ、②リンパ節への転移の有無、③離れた臓器への転移の有無の三つの要素の組み合わせによって決まる。

大きさや深さ、転移で分類

一般的には、がんが小さければ早期と思われるかもしれない。実際、乳がん、肺がんなどは、大きさが2センチ以下で転移がないなら早期だ。

しかし胃がんや大腸がんは、どれだけ臓器の壁に深く達しているかが問題で、表面から見て小さくても、深く潜り込んでいることがある。胃がん

や大腸がんは、四層になっている壁のうち、第二層までが早期、第三層以降が進行性だ。

10年ほど前のこと。30代後半の男性の胃に1センチほどの小さながんが見つかった。内視鏡検査で早期と診断され、胃を摘出した。ところが私が細胞を詳しく調べると、第三層まで達していることが分かった。1年後、がんは肝臓から全身に広がり、男性は間もなく他界した。残念なケースだった。がんは、小さければ安心、というわけではないことを、知っておいてほしい。



(北大医学部腫瘍病理学教授)